

# 構文文法は、 話しことば研究の救世主となりうるか？

岡本 順治 (学習院大学)

junji.okamoto@gakushuin.ac.jp

シンポジウム：話しことば研究をめぐる4つの問い

発表2

2008年10月12日

日本独文学会秋季研究発表会@岡山大学

01 Be: das widder so TYpisch vito für geld. (.)  
02 da hätt isch ihn doch eigentlich wieder GRAD. (--)  
03 ↑ROsenmontag ja? (.)  
04 erzählt uns die ganze zeit- (.)  
05 <<t, decr> das hat er fünf mal gesagt; (.)  
06 wie GEIL man mit denen; (-) ähm- (-)  
07 PARty machen kann.>(.)  
08 Fr: ja.  
09 Be: und dann ↑RIPPT er die voll ab.  
10 Fr: =<<all> darauf hab isch ihn [das letzte mal drauf  
11 Ch: [was hat er denn gemacht?  
12 Fr: [angesprochen.>  
13 Be: [rIppt er die voll ab. (.)  
14 Be: ey des is SO hart.  
15 Al: [WER war des? ]  
16 Ch: [was hat er denn] gemAcht?  
17 Fr: vito. (.)  
18 Be: wir hatten' (--)  
19 Die laden uns irgendwie auf pEpp ein und so- (--)  
20 war auch denen ihr lEtztes- (.) ja?  
21 Fr: ja; (2.0)

*Beispiel (1): ''vito für geld'' (Juk 20) Deppermann (2006a: 44ff.)*

523 F also der DALL hat in IRgend ner-  
524 hab ich auch nur geLEsen der sacht so ungeFÄHR  
ich- (.)  
525 äh- (.)  
526 → hat sich VORgenommen ~~was weiß ich~~ so: n (.)  
beSTIMMtes- (.)  
527 bestimmten POOL von LEUten da mal RANzukriegen,  
528 .hh und er SACHT er kricht JEden.

*Beispiel (2): Thüringen Dall Imo (2007: 141)*

## 1 はじめに

タイトルについて

「構文文法は、話しことば研究の救世主となりうるか？」⇒

「構文文法は、話しことば研究の(文法記述を確立するための)救世主となりうるか？」

確認：<「話しことば研究」が没落している>という前提・認識はない！

構文文法(Construction Grammar, Konstruktionsgrammatik) – Fillmore (1985), Fillmore/Kay/O'Connor (1988) から始まった認知言語学の一派。

構文文法は、現在(2008年10月)の時点で、統一した理論とはなっておらず、さまざまな流派が混在している。cf. 構文文法の広がり

問題提起の背景

1. 会話分析では、(言語を使った)相互行為の分析に中心がある。従来、手薄だった「文法記述」の基盤に「構文文法」が使えるのではないかと、という期待がある。
2. 近年、構文文法を取入れた会話分析がドイツでは盛んになっている。  
例) Günthner/Imo (eds.) (2006), Fischer/Stefanowitsch (eds.) (2006), Imo (2007), Deppermann (2006b)

## 1.1 目的

1. 「構文文法」を、会話分析(≒話しことば研究)に応用することは妥当か?
2. もし妥当であるとすれば、どのような意義が見出されるか?
3. 問題点はないか?

## 1.2 定義

「話しことば研究」 — 「会話分析」(Gesprächsanalyse, Konversationsanalyse) や 「談話分析」(Diskursanalyse) を包括する広い概念。

当発表では、「話しことば研究」という用語をタイトルに用いているが、実質上「会話分析」(Gesprächsanalyse) に限定する。

「会話」(**Gespräch**) に関する最低限の理解 — Das Gespräch ist eine Grundeinheit menschlicher Rede. Henne/Rehbock (2001:6)

「会話」を特徴づけるもの Ungeheuer (1974:24)

- Sprecher-Hörer-Rollenwechsel (turn-taking)
- Wechsel von Themeninitiierung und Themenakzeptierung

「会話分析」の位置づけ(会話分析には少なくとも2つの大きな流れがある)

1. 言語学： 語用論 – 発話行為論<sup>\*1</sup> – 会話分析
2. 社会学： 相互行為主義<sup>\*2</sup> – エスノメソドロジー<sup>\*3</sup> – 会話分析 (Harvey Sachs, Emanuel Schegloff, Gale Jefferson)

社会学における「会話分析」(conversational analysis) とは?

「会話分析とは、人々が実際に行なっている会話をデータにして、やり取りにおける規則やルールを見出そうとする研究方法です。ただし言語自体には関心がありません。会話分析では人々のやり取りにおいて、何がどのように行なわれているのかを調べようとします。そのための特徴的な方法が詳細なトランスクリプトの使用で、これにより人々のやり取りを非言語的な面も含めて詳しく見て取ることができるのです。」鈴木 (2007:7) 下線部は、発表者による。

\*1 日常言語学派の哲学が背景にある。

\*2 日常言語学派だけでなく現象学の影響もあるとされている。

\*3 エスノメソドロジー (Ethnomethodology; EM) ⇒ 「人々の方法論」(cf. Harold Garfinkel)

(1) 社会に参加している人々は、それぞれ独自の的方法論を用いて行動を実践しているはず。(2) 「人々の方法論」を見つけて出し、「それを通して実践を記述しよう」とする。cf. 前田・水川・岡田 (2007)

### 定義 (1) – 「構文文法」

「構文文法」 – 「構文」を単位とした文法理論。

### 定義 (1) : 「構文」 (CONSTRUCTIONS, Kontruktionen)

C is a CONSTRUCTION iff<sub>def</sub> C is a form-meaning pair  $\langle F_i, S_i \rangle$  such that some aspect of  $F_i$  or some aspect of  $S_i$  is not strictly predictable from C's component part or from other previously established constructions. Goldberg (1995: 4)

Any linguistic pattern is recognized as a construction as long as some aspect of its form or function is not strictly predictable from its component parts or from other constructions recognized to exist. Goldberg (2006: 5)

### 定義 (2) : 「構文」

1. 形式と意味のペアで構成される。注意！⇒ 「構文」は、「文」を前提としていない。  
Construction は、むしろ「構築物」と考え、文と切り放して考えると分かりやすい。
2. ある形式あるいは意味が、その構成素（あるいは、それを構成する他の構文）から厳密には予想できないもの。⇒ 「合成性の原理」(Kompositionalitätsprinzip) に従わないもの。

### 定義 (3) : 「構文」

さらに、次の要請を加える流派もいる。

In addition, patterns are stored as constructions even if they are fully predictable as long as they occur with sufficient frequency. Goldberg (2006: 5)

- あるパターンが十分な頻度で生起すれば、それは構文として脳に（そのままの形で）蓄えられている。⇒（語彙と統語規則で派生されるものではない、と主張。）  
⇒ 使用頻度を考慮することは、用法基盤モデル (Usage-Based Model) との結び付きを意味する。  
Langacker (1988), Barlow/Kemmer (2000), 早瀬 / 堀田 (2005)

## 2 構文文法の方向性

### 2.1 構文文法の広がり

現在、構文文法 (CxG) には4つの流れがあると言われている (Goldberg 2006: 213ff.)

1. UCxG: Unification Construction Grammar (Fillmore 1999; Fillmore/Kay/O'Connor 1988; Kay 2002a,b; Fillmore et al. forthcoming)
  2. CG: Cognitive Grammar (Langacker 1987a,b; 1988, 1990, 1991, 1993, 2003)
  3. RCxG: Radical Construction Grammar (Croft 2001)
  4. CCxG: Cognitive Construction Grammar (Lakoff 1987; Goldberg 1995; Bencini/Goldberg 2000)
- Web サイト <http://www.constructiongrammar.org/>
  - 構文文法の雑誌 *Constructions and Frames* John Benjamins (2009)-
  - 2008年9月25日~27日、第3回ドイツ認知言語学会での Workshop(Empirical Evidence, Converging approaches to constructional meaning) が Leipzig で開催された。
  - 2008年9月26日~28日、ICCG-5 (5th International Conference on Construction Grammar) が Austin(Texas) で開催された。
  - 2008年10月20日~21日、Freiburg で Workshop on Constructions and Variation が開催される。

## 2.2 構文文法の方向性

- イディオムを構文として捉える分析 Fillmore/Kay/O'Connor (1988)
- 項構造を構文として見る Goldberg (1995)
- 言語類型論のモデルとする Croft (2001)
- 言語獲得のモデルとして使う Tomasello (2005)
- 用法基盤モデルと結びつける Goldberg (2006), Stefanowitsch (2006)
- 形式文法モデルを目指す Fillmore/Kay/Michaelis/Sag (forthcoming)

### 構文の例

サイズや複雑性の異なる構文の例 (Goldberg 2006:5)

Morpheme	e.g. <i>pre-</i> , <i>-ing</i>
Word	e.g. <i>avocado</i> , <i>anaconda</i> , <i>and</i>
Complex word	e.g. <i>daredevil</i> , <i>shoo-in</i>
Complex word (partially filled)	e.g. [N-s] (for regular plurals)
Idioms (partially filled)	e.g. <i>jog</i> <someone's> <i>memory</i> , send <someone> <i>to the cleaners</i>
Covariational Conditional	The Xer the Yer (e.g. <i>the more you think about it, the less you understand</i> )
Ditransitive (double object)	Subj V Obj <sub>1</sub> Obj <sub>2</sub> (e.g. <i>he gave her a fish taco; he baked her a muffin</i> )
Passive	Subj aux VP <sub>pp</sub> (PP <sub>by</sub> ) (e.g. <i>the armadillo was hit by a car</i> )

## 3 従来の「会話分析」における文法記述

### 3.1 従来の「会話分析」の成果

会話分析は、

1. 発話行為の連鎖を説明してきた (cf. シークエンス分析)。
2. 会話を相互行為の中に位置づけることで、いくつかの会話の戦略（修復作業、要因コントロールなど）を明らかにしてきた。< cf. 林報告 >
3. 会話の展開の仕方が会話の種類、社会的・文化的状況、発話場面などに応じてどのように異なるのかを明らかにしてきた。< cf. 丸井 (2006), Schwitalla (2003) >
4. 言語寄りの分析としては、ある種のディスコース・マーカーを発見し、その機能とスコープを説明してきた。< cf. Fiehler/Barden/Elstermann/Kraft (2004) >

### 3.2 従来の「会話分析」の反省

- トランスクリプションの中には、さまざまな言語データが含まれている。にもかかわらず、それらの言語データの文法的（統語的）説明や発見は少なかったのではないかと！
- 原因：適切な文法モデルの欠落
- 構文文法の登場！

### 3.3 具体例 Beispiel (1) S.1 参照

従来の文法には、以下の3つの前提条件があったが、それらは、会話分析にふさわしいものではない。Deppermann (2006a: 44ff.)

- (1) 統語的単位は、完全文である。
- (2) 統語規則は形式的であり、抽象的で一般的妥当性を持つ。
- (3) 合成性の原理に従う。

例 (1) で見ると、

- 構成シグナル (Gliederungssignale) である < *ey*(Z.14), *ähm*(Z.06), *ja?*(Z.03,Z.20) >、文構造の一部ではない。前提条件 (1) に違反。
- 構造的に不規則なもの ( ? ) がある。 < *Typisch vito*(Z.01), *und so-*(Z.19) > 前提条件 (2) に違反。
- 限定的な文法的パラダイグマを持った構造的には規則的な文形成がある。 < *Da hätte ich ihn doch eigentlich wieder GRAD*(Z.02) > ここまでくると、後ろに、V können が予想されるが、ここで絶句している (Aposiopese)。前提条件 (2), (3) に違反。
- 文として不完全で、共有構文 (Apokoinu) 的になっている。 < *darauf hab ich ihn das letzte mal drauf angesprochen*(Z.10) > 前提条件 (1), (2) に違反。
- 中断し、再構成するような表現がある。 < *wir hatten' (--)* *DIE laden uns*[...] > (Z.18f.) 前提条件 (1), (2) に違反。 などなど。

#### 4 構文文法を取り込んだ会話分析

Beispiel (2) S.1 参照

<b>spezifische Konstruktion</b> [ <i>was weiß ich/weiß ich was</i> ]	
Syntax	meist äußerungsfinal, gelegentlich eingeschoben; eine der beiden festen Formen <i>was weiß ich</i> bzw. <i>weiß ich was</i>
Semantik	nur in Ansätzen vorhanden; Modalisierungsfunktion überwiegt, nicht aber die Funktion einer ‚echten‘ Frage
Funktion	Markieren einer vorangegangenen oder folgenden Äußerung als auf nicht gesichertem Wissen beruhend bzw. als Option; Überbrückung für Formulierungsschwierigkeiten, die auf nicht ausreichendem Wissen beruhen(„Markierung kritischer Formulierungen“; Stein 1995: 240); Unbestimmtheitsmarker; „Vagheitsindikator“ Stein 1995: 240
Prosodie	häufig wird das <i>ich</i> betont; ansonsten entweder prosodisch angebunden oder als eigene Tonkontur realisiert

Schema 19

Imo (2007:142)

- Imo (2007) における Konstruktion は、最大限、Syntax, Morphologie, Semantik, Pragmatik, Funktion, Sequenz, Prosodie の 7 つの項目に、値を付与する形で記述されている。
- Imo (2007) では、この他に、Schematische Konstruktion, Teilspezifische Konstruktion が提唱され、相互に関連づけられている。

Konstruktion	traditioneller Name
komplex und schematisch	Syntax („Passivkonstruktion“)
komplex und spezifisch	Idiom („unter aller Kanone“)
komplex und schematisch	Morphologie („Plural-s“)
atomistisch und schematisch	syntaktische Kategorie („Nomen“)
atomistisch und spezifisch	Wort/Lexikon („gegen“)

Schema 3, Imo (2007:33) arrangiert von W.I.; originell Croft (2002:17) The syntax-lexicon continuum

1256 H hat die LOCKen äh mit dem zopf?  
 1257 W JA genau [ und ] schwarze HAARE.  
 1258 H [ ja. ]  
 1259 ja.  
 1260 W und seine FREUNDin- (. )  
 1261 → ich weiß NICHT mehr wie die heißt;  
 1262 (0.5)  
 1263 H so ne DICKE?  
 1264 (0.5)  
 1265 W naja: ne:;

Beispiel 14 Autotour *Freundin*

Imo (2007:151)

**teilspezifische Konstruktion [ wissen + wie + (Satz) ]**

Syntax	eingeleiteter Inhaltssatz zu einem Matrixsatz; Matrixsatz häufig negiert; häufig 1. Person Singular Präsens; meist nach einem Abbruch (im Satz oder im Wort)
Semantik	semantische Valenz von <i>wissen</i> wird gefüllt
Pragmatik	Markierung einer Wortsuche; Initiierung einer Reparatur
Funktion	subordinierter Satz drückt Inhalt zu Matrixsatz aus

Schema 22

Imo (2007:152)

その他の構文文法的会話分析の例

- Deppermann (2006b) では、Deontische Infinitivkonstruktion が、Imo (2007) とほぼ同じような図式で分析。
- Auer (2006) は、so-Konstruktionen を Prosodie 特徴に焦点を絞って分析。Auer (2007) は、6 つの so を使った構文を Online-Grammatik(≈ 会話文法) として分析。
- Günthner (2007) では、会話中に現われる wo-Konstruktionen の特徴を分析し、その文法機能を考察。
- Spiekermann/Stoltenburg (2006) では、近年、会話中で語尾変化なしで使われる *lecker* を構文文法的に分析。

## 5 結論

1. 「構文文法」を、会話分析(≦ 話しことば研究) に応用することは妥当か? – Ja.
2. もし妥当であるとすれば、どのような意義が見出されるか? – これまでの演繹的文文法、規範的学校文法、帰納的言語記述では、会話に含まれる文法現象を適切に説明できないから。
3. 問題点はないか? – ある。(1) 記述法が確定していない。(2) 構文間の関係づけが不明瞭。(3) 全体像が見えない(「どこまでを構文とするのか」という問いに誰も答えられない)。

構文文法分析の特徴と問題点

- 「音と意味」のペアを独立した構築物とし、任意の文法記述の単位を設定することができる。
- 統語論の独立性を認めないが、派生を全面的に否定できるものではない。

.....  
**Transkriptionszeichen** Setling et al. (1998)

[ ]	Überlappungen und Simultansprechen
[ ]	
(.)	Mikropause
(-), (--), (---)	kurze, mittlere, längere Pausen von ca. 0.25 - 0.75 Sek.; bis ca. 1 Sek.
(2.0)	geschätzte Pause, bei mehr als ca. 1 Sek. Dauer
und=äh	Verschleifungen innerhalb von Einheiten
:, ::, :::	Dehnung, Längung, je nach Dauer
äh, öh, etc.	Verzögerungssignale, sog. „gefüllte Pausen“
akZENT	Primär- bzw. Hauptakzent
zkzEnt	Nebenakzent
?	hoch steigende Intonation am Einheitenende
,	mittel steigende Intonation am Einheitenende
-	gleichbleibende Intonation am Einheitenende
;	mittel fallende Intonation am Einheitenende
.	tief fallende Intonation am Einheitenende
<<erstaunt> >	interpretierende Kommentare mit Reichweite
<<t> >	tiefe Stimmlage
<<all> >	<i>allegro</i> , schnell gesprochen
<<t> >	<i>decrescendo</i> , leiser werdend
↑	Tonhöehensprung nach oben

.....

## 6 参考文献

- Auer, Peter (2006) Construction Grammar meets Conversation: Einige Überlegungen am Beispiel von „so“-Konstruktionen. In: Günthner, Susanne/Wolfgang Imo (eds.) *Konstruktionen in der Interaktionen*, 291-314.
- Barlow, Michael/Suzanne Kemmer (eds.) (2000) *Usage-Based Models of Language*. Stanford: CSLI Publications.
- Bencini, Giulia M. L./Adele E. Goldberg (2000) The contribution of argument structure constructions to sentence meaning. *Journal of Memory and Language* 43: 640-51.
- Croft, William (2001) *Radical Construction Grammar: Syntactic theory in typological perspective*. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Deppermann, Arnulf (2006a) Construction Grammar – Eine Grammatik für die Interaktion? In: Deppermann, Arnulf/Reinhard Fiehler/Thomas Spranz-Fogasy (eds.) *Grammatik und Interaktion*. Radolfzell: Verlag für Gesprächsforschung, 43-65.
- Deppermann, Arnulf (2006b) Deontische Infinitivkonstruktionen: Syntax, Semantik, Pragmatik und interaktionale Verwendung. In: Günthner, Susanne/Wolfgang Imo (eds.) *Konstruktionen in der Interaktionen*, 239-262. *Linguistik Impulse & Tendenzen* 20. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Fiehler, Reinhard/Barden Birgit/Mechthild Elstermann/Barbara Kraft (2004) *Eigenschaften gesprochener Sprache*. Tübingen: Gunter Narr.
- Fillmore, Charles J. (1985) Syntactic Intrusions and the Notion of Grammatical Construction. *BLS* 11, 73-86.
- Fillmore, Charles J. (1999) Inversion and constructional inheritance. In: Weibelhuth, G./J.-P. Koenig/A. Kathol (eds.) *Lexical and Constructional Aspects of Linguistic Explanation*. Stanford, CA: CSLI Publications.

- Fillmore, Charles J./Paul Kay/Catherine O'Connor (1988) Regularity and Idiomaticity in Grammatical Constructions: The Case of *Let Alone*. *Language* 64, 501-538.
- Fillmore, Charles/Paul Kay/Laura Michaelis/Ivan A. Sag (forthcoming) *Construction Grammar*. Stanford Univ Center for the Study (2007/01).
- Fischer, Kerstin/Anatol Stefanowitsch (eds.) (2006) *Konstruktionsgrammatik: Von der Anwendung zur Theorie*. Tübingen: Stauffenburg Verlag Brigitte Narr.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: Chicago Univ. Press. (河上誓作・早瀬尚子・谷口一美・堀田優子訳 (2001) 『構文文法論：英語構文への認知的アプローチ』東京：研究社.)
- Goldberg, Adele E. (2006) *Constructions at Work: The Nature of Generalization in Language*. New York: Oxford Univ. Press.
- Günthner, Susanne (2007) Zur Emergenz grammatischer Funktionen im Diskurs – wo-Konstruktionen in Alltagsinteraktionen. In: Hausendorf, Heiko (ed.) *Gespräch als Prozess: Linguistische Aspekte der Zeitlichkeit verbaler Interaktion*. Tübingen: Gunter Narr. 125-154.
- Günthner, Susanne/Wolfgang Imo (eds.) (2006) *Konstruktionen in der Interaktion*. Berlin, New York: Walter de Gruyter.
- 早瀬尚子・堀田優子 (2005) 『認知文法の新展開：カテゴリー化と用法基盤モデル』英語学モノグラフシリーズ 19. 東京：研究社.
- Henne, Helmut/Helmut Rehbock (2001) *Einführung in die Gesprächsanalyse*. 4., durchgesehene und bibliographisch ergänzte Auflage. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Imo, Wolfgang (2007) *Construction Grammar und Gesprochene-Sprache-Forschung: Konstruktionen mit zehn matrixsatzfähigen Verben im gesprochenen Deutsch*. RGL 275. Tübingen: Niemeyer.
- 石崎雅人・伝康晴 (2001) 『談話と対話』言語と計算 3. 東京：東京大学出版会.
- Kay, Paul (2002a) English Subjectless Tagged Sentences. In: *Language*, 78 (3): 453-581.
- Kay, Paul (2002b) An informal sketch of a formal architecture for construction grammar. *Grammars* 5: 1-19.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal About the Mind*. Chicago: Chicago Univ. Press.
- Langacker, Ronald W. (1987a) *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol. 1. Stanford, CA: Stanford Univ. Press.
- Langacker, Ronald W. (1987b) Nouns and verbs. In: *Language* 63: 53-94.
- Langacker, Ronald W. (1988) A Usage-Based-Model. In: Rudzka-Ostyn, Brygida (ed.) *Topics in Cognitive Linguistics*, Amsterdam: John Benjamins, 127-161.
- Langacker, Ronald W. (1990) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol.2. Stanford, CA: Stanford Univ. Press.
- Langacker, Ronald W. (1993) Reference point constructions. In: *Cognitive Linguistics*, 4:1-39.
- Langacker, Ronald W. (2003) Construction grammars: cognitive, radical and less so. Paper presented at the International Cognitive Linguistics Conference, Logroño.
- 前田泰樹・水川喜文・岡田光弘 (2007) 『エスノメソドロジー：人びとの実践から学ぶ』東京：新曜社.
- 丸井一郎 (2006) 『言語相互行為の理論のために：「当たり前」の分析』東京：三元社.
- Schwitalla, Johannes (2003) *Gesprochenes Deutsch: Eine Einführung*. 2., überarbeitete Auflage. Berlin: Erich Schmidt Verlag.
- Selting, Margret/Peter Auer/Birgit Barden/Jörg Bergmann (1998) Gesprächsanalytisches Transkriptionssystem (GAT). In: *Linguistische Berichte* 173, 91-122.
- Spiekermann, Helmut/Benjamin Stoltenburg (2006) „lecker Pilsken trinken“: Konstruktionen unflektierter Adjektive. In: Günthner, Susanne/Wolfgang Imo (eds.) (2006) *Konstruktionen in der Interaktion*, 315-341.
- Stefanowitsch, Anatol (2006) Konstruktionsgrammatik und Korpuslinguistik. In: Fischer, K./A. Stefanowitsch (eds.) *Konstruktionsgrammatik: Von der Anwendung zur Theorie*. Tübingen: Stauffenburg Verlag Brigitte Narr, 151-176.
- Stein, Stephan (1995) *Formelhafte Sprache*. Frankfurt/M.: Lang.
- 鈴木聡志 (2007) 『会話分析・ディスコース分析：ことばの織りなす世界を読み解く』東京：新曜社.
- Tomasello, Michael (2005) *Constructing a Language: A Usage-Based Theory of Language Acquisition*. Cambridge Mass.: Harvard Univ. Press.
- Ungeheuer, Gerold (1974) Was heißt ‚Verständigung durch Sprechen‘? In: *Gesprochene Sprache. Jahrbuch 1972*. Düsseldorf, 7-38.